

6 研究協議の主な内容

(1) グループ協議の内容

【討議の柱1 単元デザインは『児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現』に結びついていたか】

- ・ Padlet を活用した他者参照やコメント交流を通して、生徒は他者の考えを踏まえながら自身の表現を見直す機会を得ており、学習過程を振り返るメタ認知的な学びの促進につながっていた。
- ・ 宿泊研修での経験と関連付けた題材設定や、SNS を活用した発信活動は、生徒にとって身近で現実味があり、学習への内発的な動機付けを高める効果が見られた。
- ・ 言語活動においては、本単元で扱った表現に加え、既習事項を自発的に活用する生徒の姿が確認され、単元を越えた知識・技能の活用という点において、深い学びにつながっていた。
- ・ 文字数制限という SNS の特性を生かした学習環境は、簡潔かつ的確な表現を意識した推敲活動を促し、表現の質を高める手立てとして機能していた。
- ・ グループ活動においては、話し合い活動と個人の取組を場面に応じて切り替えながら学習を進める姿が見られ、それぞれの学習ペースを尊重しつつ、協働的な学びと個別最適な学びの両立が図られていた。

【討議の柱2 発問や可視化の手立ては児童生徒が資質・能力を身に付ける上で有効だったか】

- ・ Padlet を活用した意見の可視化および他者参照が容易にできる環境は、多様な表現を共有することを可能にし、生徒の学びを相互に深める手立てとして有効だった。
- ・ 学習に困難を感じやすい生徒においても、他者の表現やコメントによるフィードバックを手掛かりに活動を進める様子が見られ、自己肯定感の向上や学習意欲の高まりにつながっていた。
- ・ 発問や課題内容の明確化など、教師による適切な指示は、生徒に思考の見通しをもたせ、活動を円滑に進める上で重要な役割を果たしていた。
- ・ 「相手意識」に着目した指導は、生徒が表現を工夫する際の視点として意識化されており、見方・考え方の育成という点で意義があった。
- ・ 特定の文法事項の使用自体が目的化しないよう、表現の意図や目的との関連をより明確にする指導の工夫が求められる。
- ・ 生徒のコメントを全体で共有する場面では、既習表現の活用や新たな表現への気付きが広がり、言語活動を通じた学びの深化が見られた。
- ・ パフォーマンステスト等の結果と関連付けながら、これらの手立てが資質・能力の定着にどの程度寄与したのかについて、より多面的に検証していく必要がある。

(2) 指導主事の助言

〈上川教育局 教育支援課 学校教育指導班 主査 中山 智洋〉

①児童生徒の思考に沿った単元デザインについて

- ・ 生徒一人一人の学びの状況や思考の進度を踏まえた、丁寧な単元デザインがなされていた。「ミッションシート」を通して、教師が生徒の学びのデザインを把握し、それぞれに必要な学習内容や関わりを意図的に設定している点が特徴的であった。
- ・ 単元の終末に向かって、これまでに学習してきた知識や技能を総動員しながら課題解決に取り組む構成となっており、単元全体が「学びを深める」流れとして設計されていた。単元のゴールとなる言語活動を見据え、必要な言語材料を生徒自身が獲得しながら思考を積み重ねていく構造が、生徒の思考に沿った単元デザインにつながっていた。

②児童生徒が主体的に学ぶための課題設定と見通しについて

- ・主体的な学習を支えるために、単元や本時の課題が生徒にとって「自分ごと」として捉えられるよう工夫されていた。教師が一方的に活動内容を提示するのではなく、単元の見通しや学習の方向性を示した上で、生徒自身が学習方法や教材、学習の進め方を選択・判断できる環境が整えられていた。
- ・単元を山登りに例え、ゴールとなる言語活動に向かって段階的に課題に取り組む構成は、生徒にとって見通しをもって学ぶことを可能にしていた。課題解決の過程で「なぜこの表現が必要なのか」「何を身に付ける必要があるのか」を意識させることで、主体的な学びが促されていた。

③児童生徒が資質・能力を身に付けるための自己選択の機会と学び合いについて

- ・生徒が資質・能力を身に付けるための自己選択の機会が意図的に設定されていた。「ミッションシート」における段階的な学習構成（第1段階から第3段階）は、生徒が自分の到達度を意識しながら学習を進め、自己調整することを可能にしていた。
- ・言語活動を一度で終わらせるのではなく、他者との関わりを通して振り返り、再構成（リメイク）する学習過程が設定されていた点は、学び合いを通して思考を深める重要な要素であった。パフォーマンステストにおいても、リトライを前提とした評価の在り方が、生徒の「次はこうしてみたい」という主体的な学びにつながっていた。

④児童生徒が学びの価値を感じる振り返りについて

- ・振り返りの場面では、生徒が自らの学びの価値を実感できるような工夫がなされていた。単なる活動の振り返りにとどまらず、「もっと良い表現にしたい」「次はこう工夫したい」といった、次の学びにつながる内省が促されていた点が特徴的である。
- ・リメイクという活動を通して、生徒が自分の表現を見直し、よりよいものを目指そうとする必然性を感じ取っていたことは、自己評価の育成につながっていた。学びを重ねることで価値が高まっていくという実感をもたせる振り返りが、生徒の主体的な学習を支えていた。

〈旭川市教育委員会 教育指導課 課長補佐 柳澤 麻弥〉

①児童生徒の深い学びを促す教師の働きかけについて

- ・近年、生徒が主体的に学び、自己調整を図りながら資質・能力を身に付けていくことの重要性が指摘されている。そのためには、学習者一人一人の学びの状況を丁寧に見取り、適切な指導や関わりを行う教師の指導性が重要であるとされている。
- ・「深い学び」とは、既存の知識と新たな知識を結び付ける「知のネットワーク化（精緻化）」によって、知識や技能が関連付けられ、構造化・身体化・高度化されることによって駆動する状態に向かうこととされている。このような深い学びに向かうためには、教師の意図的な働きかけが不可欠であり、生徒が最も資質・能力を高められるように単元を構成すること、丁寧な動機づけを行うこと、学習環境を適切に構成すること、そして一人一人の学習状況を見取ることが、教師の指導性として挙げられる。特に丁寧な動機づけにおいては、生徒が「自分にとっての課題は何か」を捉え、学習のゴールやプロセスを明確に見通しているかを重視する。
- ・生徒がどこにたどり着きたいのか、どのような手段を用いて、どのように学んでいくのかを理解しているほど、個別の学びは充実するとされている。そのため、学習方略を身に付けさせる視点や、それを支える学習環境の構成も教師の重要な役割である。
- ・振り返りを充実させることも深い学びを促す上で欠かせない。授業中の気付きや感じたこと、話合いで出た考えを記録させることや、教師が必要な情報を選別し板書として残すことにより、学びの過程が可

視化され、生徒の思考の深化につながる。

- ・上川研修センターの研究の核である、「生徒の深い学びは、学習者の主体性に委ねるだけでなく、教師が意図をもって単元を設計し、動機づけや学習環境の構成、見取りと関わりを通して支えていくことで実現される」ことは今後も目指すべきものである。

②教科の特質を生かした発問について

- ・本時の授業では、英語科の特性である「言語を用いて他者と関わる活動」を中核に据えた発問が設定されていた。困っている外国の方の投稿に対して返信するという場面・状況が明確に示されており、生徒にとって「なぜ英語で書くのか」「誰に向けて書くのか」という必然性が生まれていた。
- ・単元の導入段階で目指すゴールとなる投稿例を提示することで、ゴールに向かって各時間で何を学ぶ必要があるのか、どのようなプロセスで取り組むのかを意識させる発問が行われていた。これにより、生徒は自分にとっての課題を捉え、学習の見通しをもった上で活動に取り組むことができていた。
- ・発問は、単に正しい英文を書くことを求めるものではなく、「相手にとって分かりやすいか」「どのように伝えればよいか」といった表現の質を問い直す内容となっており、英語科に求められる相手意識を伴った言語活動の充実につながっていた。

③思考を束ねる可視化の手立てについて

- ・本時では、Padlet や「ミッションシート」を活用し、生徒一人一人の思考や学習過程を可視化する手立てが意図的に構成されていた。Padlet を用いた投稿や他者参照により、生徒は自分の表現を他者の考えと比較しながら見直し、他者評価を踏まえて英文を再構築する姿が見られた。
- ・「ミッションシート」を活用することで、学習方法の選択肢や振り返りの視点が明確になり、生徒は自己選択・自己調整をしながら学習を進めていた。教師は、生徒が選択する際に必要となる情報や選択肢をあらかじめ提示し、学習環境を意図的に整えていた。
- ・授業中の気付きや話し合いの内容を記録させるとともに、教師が重要な情報を選別して板書に残すことで、個々の思考が学級全体の学びとして共有されていた。こうした可視化の手立ては、ICT を効果的に活用しながら、深い学びを支える環境づくりとして機能していた。